

学生相談事例における人間関係の客観化に関する検討

西村 彩[†] 世古 拓也[‡] 小田 尚宜[§] 武藤 敦子[§] 犬塚 信博[§]

[†]名古屋工業大学工学部電気情報工学科 [‡]名古屋工業大学工学部情報工学科

[§]名古屋工業大学大学院工学研究科情報工学専攻

1. はじめに

近年、大学のユニバーサル化、情報化の進展、グローバル化などの様々な社会状況の変化に伴い、大学には多様な学生が増えている。そのため、学生の抱える悩みや困難は多様化し、学生相談の利用件数は年々増加している。それにも関わらず、学生相談の人的リソースは限られ、担当者の過重負担が指摘されている[1]。今、学生相談の充実が大学にとって緊要な課題である。

一方、学生相談事例の客観的分析はあまり行われていない。相談事例に対し客観的分析を行うことで知見を得て、学生相談にフィードバックすることができれば担当者の負担を軽減できる。しかし、相談事例には複雑な特徴があり、データベース化のためには様々な課題がある。

相談事例における人間関係の表現は、データベース化のための課題の一つである。本稿の目的は、学生相談事例を構成するものの中で、相談者の関わる二者間の人間関係をより客観的に表現することである。これによって人間関係の変化に着目した相談事例分析が可能となる。

2. 学生相談の方法と記録

学生相談は学生を対象とするカウンセリングであり、以下の流れで行われる[2]。

1. 悩みや困難を抱えた学生が受付で相談を申し込む。
2. 受付で学生に相談申し込み票を記入してもらい、相談の受理が行われる。
3. 相談面接を行う。
4. 相談の記録をする。
5. 面接を継続する場合は3, 4を繰り返す。

図1は相談事例の特徴を模式的に示している。1回の面談(あるいは、メール交換等)をセッションという。面談では、本人の想起に応じて過去の事柄が順不同で述べられる。図1ではセッション1で内容A、次のセッション2で内容Bが語られるが、本人が経験した時間軸では内容BがAよりも以前の出来事である。このように、記録による時系列と本人の経験による時系列とは異なる。

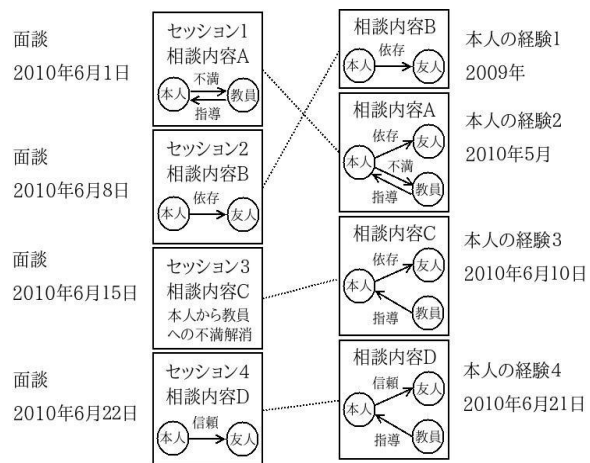


図1. 相談構造の例

セッション2で内容Bが語られるが、本人が経験した時間軸では内容BがAよりも以前の出来事である。このように、記録による時系列と本人の経験による時系列とは異なる。

小田ら[3]は、時間軸の問題に加え、各場面に現れる人間関係を扱う学生相談システムを設計した。

3. 学生相談における人間関係

3.1. 主観的關係を表現する属性

学生相談における人間関係には、信頼や嫌悪など、主格が対格に対して抱く心理的な関係(主観的關係)と、指導教員、父、友人など主格と対格の立場等の関係(客観的關係)の二つが存在するとする。本稿では主観的關係を、名古屋工業大学学生なんでも相談室のカウンセラー、相談員の協力を得て、カウンセラーが得た情報から客観的に評価可能な属性を与えた。これを表1に示す。

維持期待(+/-)は、主格がその関係を維持することを望んでいるかで定義した。それに対して貢献(+/-)は、カウンセラーからみてその関係を維持することが望ましいと考えられるかで定義した。

距離(N/M/F)は、主格から対格への心理距離を表し、近接(身体的接触を持てる)、中位(話しかけられる)、遠(話しかけられない)の三つを定義した。

最後に、優位(E/Q/A)は、その関係は主格と対格、どちらが優位な関係なのかを表し、対格側が優位、対等もしくはどちらかが優位な関係ではない場合、主格側が優位の三つを定義した。

Externalizing Human Relationships in Student Counseling Cases, Aya NISHIMURA[†], Takuya SEKO[‡], Naotaka ODA[§], Atsuko MUTOH[§], and Nobuhiro INUZUKA[§]

[†]Department of Electrical and Computer Engineering, Faculty of Engineering, Nagoya Institute of Technology (NIT).

[‡]Department of Computer Science, Faculty of Engineering, NIT.

[§]Department of Computer Science and Engineering, Graduate School of Engineering, NIT.

表 1. 本研究で提案する主観的関係の属性

属性	値	説明
維持の期待	+/-	主格がその関係を維持することを望んでいる(+)か、否(-)か。
貢献	+/-	カウンセラーから見て関係の維持が、問題の解決に望ましい(+)か、否(-)か。
距離	N/M/F	主格から対格への心理距離。 Near(近接) : 身体的接触を持てる Medium(中位) : 話しかけられる Far(遠) : 話しかけられない
優位	E/Q/A	この関係における主格と対格の優位性。 主格(Ego)が優位、対等(eQual)、対格(Alter)が優位。

以上の四つの属性を用いることで、二者間の人間関係における主観的関係を客観的に表現した。

3.2. 属性を利用した人間関係の可視化

定義した属性を用いて、実際に複数の相談事例について検討した。相談内容は厳格に秘匿されるため、相談者本人が研究利用を許可している事例から個人を特定できる情報を削除し、さらに状況を部分的に改ざんした研究用の事例の提供を得て利用した。図 2 はその 1 例である。

この例は、引きこもって修学が遅れていた学生に手を差し延べる支援者に、本人も母親も困惑しつつ最終的に受け入れ、指導教員とのコミュニケーションを回復し、卒業に向かう内容である。セッション数 14 で構成され、4 人の人物が現れ、延べ 20 件の関係が現れている。

人間関係の構造の変化は、本人の経験した時間軸にそって主観的関係の属性、もしくは客観的関係のうち一つ以上が変化したことによって起きると考える。そこで図 2 は、主観的関係の属性、もしくは客観的関係の変化する時点で場面を区切って表現した。また、各属性を値の場面ごとの変化を図 3 に示した。

時間を経て変化する人間関係を、複数の視点から分析することができる。この例では次のことが観察される。

- ・問題解決へ貢献すると考えられる関係も本人が望む関係も場面を追って割合が増している。
- ・人物間の距離が遠から中位に早い段階で変化している。
- ・後半で相手(対格)を優位とする関係が増しており、尊

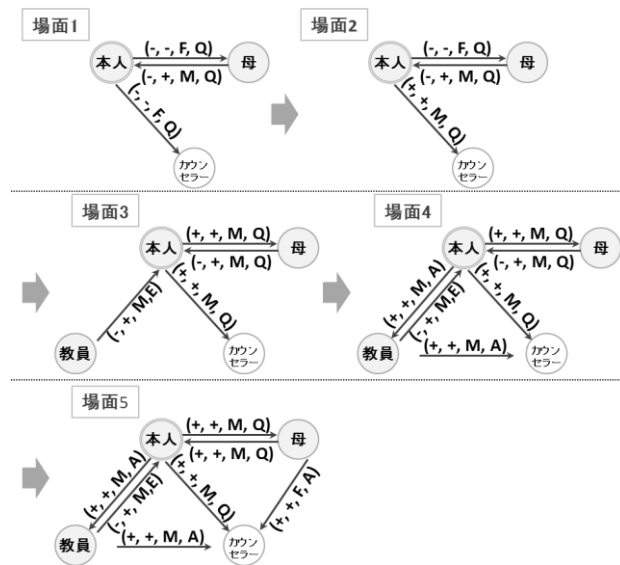


図 2. 属性を利用して表現した相談事例

敬や相手への好意が増していることを反映している。他事例も同様に属性付加、分析が可能であることを確認した。

4. おわりに

学生相談について分析するための課題の一つである、心理的人間関係を定量的に扱うため客観的に定めることが可能な属性を与え、複数の事例に適用し利用可能であることを確認した。カウンセラーの意見としても相談を記録する際にこれらの属性を記録することは障害にはならないとしている。ただし心理的距離については相談者自身への問診によってより詳細な距離を定めることも可能であるとの助言を得ている。効果的な分析を行うためには多くの事例を利用した分析が必要であるが、そのための事例採取方法等は今後の課題である。

参考文献

[1] 文部省高等教育局・大学における学生生活の充実に関する調査研究会「大学における学生生活の充実方策について(報告) — 学生の立場にたった大学づくりを目指して —」, 2000.
 [2] 日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会「学生相談ハンドブック」, 学苑社, 2010.
 [3] 小田尚宜, 武藤敦子, 犬塚信博「相談構造を考慮した学生相談記録システムの提案」第 10 回 情報科学技術フォーラム論文集 D-032, 2011.

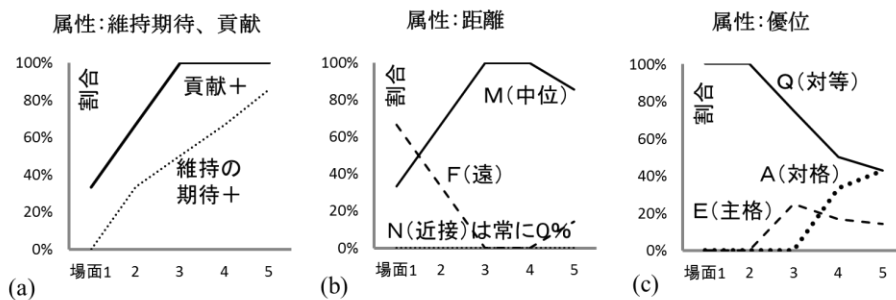


図 3. 相談事例の場面経過による属性値の変化(一例)